連載◇リレーエッセイ　私が出会った大阪文学学校⑪

熱くひりひりした季節

島田勢津子

二十歳過ぎで文校に飛び込んだのは、１９７５年のこと。仕事も通いやすいように梅田の商社を選んでいた。前号を読むと、津木林さんより半年先だった。十代から詩を書き、小説を乱読して文学の毒にどっぷり漬かった日々の後、バイトしながら通信で小説の勉強をした。萩原朔太郎に衝撃を受け、金井美恵子に憧れて受験勉強を放棄し、文校の最初の提出作は、もろに影響を受けたものになった。

しかし、出会いというのは不思議なもので、いきなり三交替で鉄工所に勤めるチューター、福元早夫さんにどやしつけられる。「嘘を書くな、自分のことを書け」と。耽美的とか、レトリックとかは吹き飛ばされて、アランシリトーを読むことになる。アンチロマンとか口にも出せずリアリズムのお勉強。でもシリトーは笑えた。インドア派でヒッキーでは小説は書けない。書くには体力がいると思い知る。

二次会は森ノ宮までタクシーを乗り合わせて当時の文校たまり場の居酒屋「千成」まで通った。（73年まで森ノ宮・労働会館だったため）冬はコートを着たままでないと寒いような店で、大皿おでんを囲み、安酒を飲む楽しみを覚えた。しかし、酒が入ると福元チューターはますます意気盛んになり、しまいには説教し出すのだった。

実際の私のＯＬ生活など書くに値するとは思えず、細部とかイメージとか物語を取ってしまうと、私には何もなかった。ぼんやりと後期に移ってチューターは松田伊三郎さん。今度は物静かな方で何も押し付けない。一年過ぎて軽いエッセイを書いて出したら、思いがけず『新文学』（現『樹林』）の雑記欄に掲載されることになった。松田さんは詩がメインの方で、後の師匠となる作家・川崎彰彦さんの系譜であった。

そのころはまだ事務局にいらした川崎さんと「千成」で遭遇して握手を求められ、驚く。隣には卒業生の怪しげな男性がいて、私はその人とは握手しなかった。要はからかわれていたのだが、他のクラスのチューターやメンバーと出会うこともあった。私たちが説教されている間、奥のテーブルでは川崎さんが「知床旅情」を歌い、隣のクラスは成田闘争のギロンを戦わせている。そんな場面もあっただろう。

『新文学』誌上で活躍され『文学界』転載作もある高見堯さんが私のエッセイを読んで「一緒に同人誌に参加を」と伝

え聞く。やはり川崎クラスの卒業生だった愛知哲さん（新文学に作品掲載）たちが立ち上げた『星』に高見さんと参加するが、高見さんはすぐに逃亡。ちなみに高見さんは後にチューターになるが、まだ若く、初日に文校に来る前に谷六の喫茶店で怖気づいて無断欠席、逃亡している。

後の『黄色い潜水艦』（８４年川崎刊）に繋がる道はこのときから続いていたらしい。事務局には宇多滋樹さんもいた。３号から参加して川崎さんのクラスではなかった私が、師亡き後も編集を引き継いでいるのは不思議だ。

研究科は高村三郎さん。高村さんには「もういい加減に、思いつきで書くのを止めませんか」と言われ、研究科誌に載ったシュルレアリズム風の夢をテーマにした作は「こんなものを今載せてはいかん」と怒られる。その真意は不明。

高村さんの許可がないと卒業できないというので、費用もなく慌てて意を伝えると、自分で作品を選び、そのレポートを報告できたら良いとのこと。『マンスフィールド短編集』を課題作として報告した。この時、自分が気に入った作品を他者はどう読むのかが面白かったのを覚えている。余談だが、後に夫になる人とも、文校で出会っている。

実人生では、安アパートに住む（リルケの「マルテの手記」を読んで家を出る馬鹿馬鹿しさ！）安月給のＯＬで、小説の方向にも迷って居るだけ。生活と時間に追われて作品も書けずにいたが、もうお腹いっぱいになる程の個性と出会いに恵まれた二年間であった。その後の日々にも、文校の二年間は色濃く残り続け、訪ねたいけど簡単には行けない場所となる。『黄色い潜水艦』に拾ってもらって、じくじくと諦めずに書いてきた。

そしてウン十年の時が経ち、１５年の春にチューターとして再び文校の扉を開くことになった。森口さん、佐伯さん、平野さん、夏当さん、西村さん、高田さんなど知遇の存在が心強かった。

当初、書物や書類や埃は増えても昔と変わらない教室の風景に途惑った。変わらないけど、同じ場所だけど、私の記憶の中の文校とは違う。それはまた別の場所にあるようだ。

チューターとしてこの五年半に何ができたかと、時々思うことがある。本科のチューターだった佐久間慶子さんは新人の私にも気配りされ、佐久間さんのクラスから生徒さんがよく進級された。しかし、熱血指導の佐久間さんの後で、「もっと厳しく指導を」と言われることもあった。何せ自分の記憶でも最初のチューターは印象が強い。

だが私の師匠、川崎さんは、同人誌の編集者として再会した時、すでに半身不自由で後には言葉もはっきり聞き取れなくなった。それ以前にすごくシャイで、人に何かを強く言う方ではなかった。たった一度だけ同人に声を荒げたことがあり、それを恥じて編集者を降りたいと言ったほどだ。身体の不自由も理由だった。

「照れず、衒わず、必要なことを書く」「言葉が多すぎる」「好きな人のことを書けば良い」覚えているのはそれくらいだ。

潜水艦のメンバーは自立度を高めるしかなかった。誰にも読んでもらえないまま、作品を仕上げてくしかなかったのだ。

良い悪いは置いて、各人が全く違う個性の作品を出している。
今、文校周辺の若い世代の同人誌では事前の合評が恒例となっていて、作品の完成度からすると、それは素晴らしいことだと思う。
私は個々の書き手に対して、まず良いところを見つけたい。どういう方向が向いているのか、どうすればもっと良いものになっていくのか。今見えているものが、稚拙だったり言葉が足りていなかったりしても、その人が表したいことは何か。あるいは、志は高いのか、俗に流れていないか。真実はそこにあるだろうか。基本的なことは本科で学んでいるはずだから。そんなことを考えながらやってきて、上手く流れに乗れた方もいる。少しはお役に立てたのではないだろうか。
今年のコロナ禍のなかでも、どうにか生き延びている文学学校。事務局員の奮闘、協力もさることながら、チューターとしてもＰＣを駆使し、画面（ＺＯＯＭ）を通した合評などに追われた。クラスの方たちの「何とかして教室で再開して欲しい」「それが無理なら、画面でも良いから」という熱い思いがそこにあった。
大阪文学学校は、これからも学生、卒業生や新旧の事務局、チューター、それぞれの共同幻想ともいうべき存在としてあり続けるのではないだろうか。もちろん、幻想ではなく現実でないと困るけど。私もクラス生と一緒に、あともう少しは学んでいきたいと思っている。